子壇嶺城戦記

神光寺かをり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
子壇嶺城戦記

【Ｎコード】
Ｎ４０６８Ｕ

【作者名】
神光寺かをり

【あらすじ】
Ｗｅｂサイト「お姫様倶楽部ｐｅｔｉｔ」より転載。
信濃の国上田の地侍杉原四郎兵衛は、徳川家康が攻め込むと聞きくや、上田城主・真田昌幸に反旗を翻して子壇嶺（こまゆみ）の古城に立てこもった。
彼らの始末を命じられた真田信之は、弟信繁とわずかな歩兵を引き連れて古城に向かった。
戦国末期、ほんの数日間の「反乱」の顛末。

天正十三年（１５８５）、第一次上田合戦（神川合戦）が舞台。

【一】

長野県上田市に、神川（かんがわ）という所がある。

国分寺史跡の西を流れる細い川の名であり、その周囲の地籍の名である。

大久保忠教……講談で一心太助が「親分」と慕った、天下のご意見番こと大久保彦左衛門、と呼んだ方が通りがよいだろう……が、著書「三河物語」に以下のようなことを記している。

「当方ことごとく腰抜け果て、震え上がり返答する者なし。その様、下戸に酒を強いたるごとし。この様な者どもに領地を与えるなどもったいない」

時に天正十三年（１５８５）。

忠教が「味方の死者三百五十余名」と記し、真田方の史官が「敵方千三百余を討ち、味方四十余死す」と数えた徳川大敗の地、それが、神川なのである。

さて。

その合戦の直前、奇妙なことが起きていた。

上田の南東に、青木という村がある。その地の、子壇嶺（こまゆみ）という山に、杉原四郎兵衛と名乗る地侍に率いられた、数十の徒党が登っていたのだ。

標高は千二百二十三メートルと言うが、上田盆地自体が海抜三・四百メートルであるから、差し引いて九百メートル強の山である。

その子壇嶺岳の山頂に、古い山城の跡があった。

うち捨てられた城である。もちろん、城郭はない。礎やら、堀跡

やらがわずかに残っているだけだ。
息を切らし、ようよう山頂にたどり着いた彼らは、そこに砦を建てた。
できあがったのは、羽柴秀吉の「一夜城」などとは比べるべきもない、粗末な掘っ建て小屋。
そうして、
「我らは徳川に味方せん。逆賊・真田を討ち滅ぼさんがため！」
などと近郷集落に向かい声高に触れ回り、兵糧と称して、米・味噌、そして酒を徴収した。

蒸し暑い夜だった。
「四郎！」
垢の染み着いた頬のあたりをこすりながら、従兄の次郎太が呼んだ。杉原四郎兵衛は不機嫌そうな目をやった。
「総大将は俺だぞ」
「なにが」
次郎太は腹を抱えて笑った。
「なにが総大将だ。二十やそこらの食い詰め百姓の頭になったのが、そんなにうれしいのか？」
「百姓じゃねぇ。俺達は武士だ！」
四郎兵衛は怒鳴った。
この「城」ができる前であったなら、その辺で雑魚寝している連中が驚いて跳ね起きたろうが、今では皆、四郎兵衛の大声に慣れきって、寝返りの一つも打たない。
「あの真田の連中と俺達のどこが違うと言うんだ！？　連中は、落ちてきた源氏の傍流の滋野氏の、そのまた傍流の海野氏の、そのまたまた傍流じゃないか！」
「俺達にはたどる本流すらねぇ。先祖が解るだけ、格が違うんじゃねぇか。……大体よぉ」
宍鍋を掛けた炉の煙が、急ごしらえの屋根から抜けてゆく。

「お前、本気で真田に楯突く気かよ？　それもこの人数で」
「これだけ居れば十分だ」
「真田昌幸ってのは武田信玄入道の直弟子だ。戦上手だって言うぜ」
「戦は、やらん」
にやり。
「な？」
「やらんでも済む」
「どういうこった？」
次郎太はしかめっ面で聞き返した。
「徳川の本隊が来てるンだぜ。あの小城に、万の軍勢が来る。……なにが信玄の直弟子だ、戦上手が聞いて呆れる。あんな真っ平らな場所にあんなちっぽけな城を建てて。ちょいと揺すれば簡単に落ちる」
四郎兵衛は子供じみた笑顔を、次郎太に突き付けた。
「だからよ、真田が負ける前に、徳川方に付くのさ。俺は真田の仲間じゃねぇ、って最初に触れ回っておけば、真田が負けた後に徳川が目を付けてくれる。負けてとっ捕まった奴は出世できねぇだろうが、最初から味方なら……」
「小賢しい野郎だぜ」
次郎太は吐くように言った。
「次郎哥（あに）ぃ、その小賢しいのに、何でわざわざくっついてきた？哥ぃも真田は負けるとふんでるンだろう？」
四郎兵衛の酒臭い息が、熱を帯びていた。
次郎太はかすかに笑いながら、屋根の隙間から空を見上げた。
満天に、星が瞬いている。

【二】
閏八月二日。
戦は始まった。

無論、真田と徳川との間に、である。

神川の右岸に真田兵二百、率いるのは真田源二郎信繁。

昌幸の次男坊は、父から命を受けていた。

「軽く戦い、軽く退け」

一方、その昌幸の備えは、五百の兵と上田城である。

戦の口火が切られても、昌幸は鎧もつけず、家臣の禰津(ねづ)長右衛門とともに平然と碁盤を囲んでいた。

やがて。

源二郎と二百の兵達は、主命を全うした。

徳川の先方が神川を渡る。

「掛かれぃ！」

源二郎の号令が下った。

槍を合わせる。すぐさま引く。

矢を射掛ける。遁走する。

じわり、じわり。

寄せ手は勝ち戦を確信した。そうして、「敗走」する真田の兵達を追撃し、領内……いや、真田昌幸の敷いた陣の中に深く入り込んでいった。

七千余……杉原四郎兵衛が兵数を聞き誤ったのではない。徳川が振りまいた「情報」に誇張があったのだ……の兵馬が、ひたすら上田城を指して疾駆する。

「退けぃ！　疾く退けぃ！」

兜の面当ての下で笑いながら、源二郎は駆けた。

やがて、徳川方は逃げ去る二百を見失った。

だがそれを気にかける者はいない。目の前に城があるのだ。

しかも、抵抗がない。人気がない。

「勝ち戦ぞ、攻めよ」

誰かが叫んだ。

誰もが突き進んだ。

大軍である。
先頭が千鳥掛けの柵に進路を阻まれると、当然、後が詰まる。
それでも突き進む。
二つ目の柵、三つ目の柵。
曲がりくねった道筋に、人馬の群れが前後もなく行き詰まった時、熱い風が吹いた。
「火攻めだぁ！！」
城下の町並が、ごうごうと燃えていた。
そして、城門が開いた。
城兵五百。鬨の声を上げ、攻めかかる。
さらに、
「突撃ぃ！」
どこからともなく伏せ手がわき出、四方を囲んだ。
昌幸が長男・源三郎信之が指揮する、武装農民の群である。
退路はない。
火に、柵に、そして人に阻まれ、七千の大軍は総崩れとなった。
呆気のないことであった。たった一日で（一応翌日、撤退した徳川軍が、支城である丸子城を攻めているが、当然と言うべきか、何の益も得られなかった）戦は終わった。

「信じられねぇ！」
杉原四郎兵衛は「物見」の言葉に、へなへなと座り込んだ。
「徳川は一万だぞ！？　真田の方は兵千足らずと百姓が三千だって言うじゃねぇか！　倍の上も違うってのに、どうやって勝ったってンだ！？　それも、たった一日で！」
神川の合戦から、早五日が経っていた。
四郎兵衛は呆然と彼方を眺めた。足下の絶壁の先、上田城がある方角は、霞のような雲のような、あるいは煙のようなものに包まれている。

と。
どん、と、空き腹に響く音がして、地面がかすかに揺れた。
座り込んでいた四郎兵衛が、背中を突かれたように前のめりに倒れ込んだ。
「真田の軍が攻めて来た！」
誰かが叫んだ。
誰もそれを確認したわけではない。しかし、恐怖が場を支配した。
どん、どん、どどん。
続けざまに爆音が鳴る。回数など数えられない。
子壇嶺の「城」は音を立てて崩れた。
地揺れのせいではない。てんでに逃げまどう四郎兵衛の「兵」が、あちらに引っかかり、こちらにぶつかりして、自ら壊しているのだ。
その争乱の中、麓から鬨の声が聞こえた。
太鼓、鳴り板、人馬の声。
こだまするそれから、寄せ手の数を計ることはできなかった。
「畜生っ！」
四郎兵衛は這いずりながら崩れた城に入り、刀を掴んで出てきた。
「兵」は、もう一人も残っていなかった……次郎太を除いて。
「四郎、何をする気だ！？」
「戦だ、戦をやる！」
「やらねぇって言ってたじゃねぇか！」
「あン時は、そういう策だった。でも、今はやる」
「無茶だ！　徳川の一万が負けたンだぞ！　俺達二人じゃ勝てねぇよ」
次郎太は四郎兵衛の胸ぐらを掴んで、泣いた。
「哥ぃは、逃げてもいい。負けは負けでも、討ち死には少ない方がいいしな」
四郎兵衛は青い顔で歯を鳴らしながら、必死の笑みを作った。
「ぬかせ。俺も武士だ。敵に背中は見せられねぇよ」
鼻水を流しながら、次郎太は辺りを見回し、棒切れを一つ拾った。

「挟み撃ちにされてるみてぇだ」
四郎兵衛が言うと、次郎太はうなずいた。
二人は背中合わせに身構えた。
四郎兵衛は鬨の声が聞こえた方を向き、次郎太は爆音が鳴った方を見た。
険しい山をの前後ろから、敵は、ほとんど同時に現れた。
その数は……二人だった。

【三】
「父上、お願いがございます」
日頃おっとりとおとなしい源三郎信之が、珍しく強い口調で言う。
「言え」
上田城内……この日も昌幸は碁に興じていた。
相手は源二郎信繁である。
「信之にも手柄を立てさせてくださいませ」
「手柄？　源三（げんざ）、七千を三千で蹴散らしたのは、手柄の内に入らぬか？」
「先陣の誉は、源二でした」
源三郎、この年二十歳。体躯は立派ながら、顔立ちは幼い。
その幼顔が、口をとがらせていた。
碁盤を囲む父と、ことさら弟は、困惑して
「源三どの、あれは先陣とはもうせますまいて。なにぶん、逃げただけにござれば」
頭を掻いた。
源二郎は、源三郎と一つ違いの十九。父に似て矮躯の上、老成した顔かたちをしている。
「それでも、この戦を始めたは源二。ならば、この戦を終わらす役目、信之にお任せくだされませ」
源三郎は「この」という語に力をいれて言った。

真田と徳川の争いごとは長引く。……真田の家中の者は、みなそれに気づいている。
「何が望みか？」
昌幸が立ち上がった。
「子壇嶺の、一揆の始末」
「任す」
「ありがたく、承ります」
深々と頭を下げる源三郎に、昌幸は続けて
「何が要る？」
と尋ねた。
「大砲（おおづつ）、十門」
源三郎は顔を上げ、にこりと笑った。

翌朝。
騎兵二。あとは足軽が二十ほど。
荷駄は大砲のみ。行厨（弁当）は各人握り飯二つずつ。
それが、真田源三郎信之の「軍」であった。
なお、抱え大筒とは大型の火縄銃のことである。別名を大鉄砲ともいい、巨大な銃身と凄まじい火力を持つ攻城戦用の火器である。火縄銃の形をしたバズーカ砲を想像していただければよいだろう。
「なにゆえ付いて来るか？」
馬上で源三郎は訊いた。返ってくる答えは、おおよそ見当が付いている。
「面白そうだから、ではいけませぬか？」
馬首を並べる源二郎が答えた。源三郎の見当どおりの言葉だった。
「手出しはいたしませぬよ。なにしろこれは、源三どのの戦にございますれば。それに、後で文句を言われるもかないませぬし」
「なんだ。手伝わせようと思ったにな」
「やらせてくれますか？」
嬉々とした声を上げる弟を、源三郎は笑いながら眺めた。

「大砲の討ち手が足らんからな」
「最初から足らぬように数えてきたのでしょう？」
行軍は、半日に満たなかった。
「それで、策は」
子壇嶺岳の麓で握り飯を喰いながら、源二郎が訊ねる。
源三郎も、握り飯をほおばりながら、
「挟撃だ。お主に大砲と兵を半分預けるから、山の裏手に回って大砲で威嚇しろ。できるだけ大きな音を立て続けるんだぞ。山を登るのは源二だけでよい。……わしは正面から行く。こちらも、鐘太鼓を打ち鳴らし、鬨の声を上げ、多勢と思わせる」
「承知！」
小気味よく答えると、源二郎は射手をまとめ、山の裏手に回る道へ進む。
その背に源三郎が声を掛けた。
「源二、人死にが出ぬようにせよ」
「にわか仕立ての似非侍に倒されるような脆弱者が、真田の家中にいるはずもなし」
からからと笑い振り向いた源二郎に、源三郎は言った。
「味方に、ではない。その似非侍に、だ」
風のない、暑い一日が始まった。

◇◆◇◆

杉原四郎兵衛とその徒党二十余名は、ことごとく捕縛された。
数珠繋ぎに縛り上げられ、上田城まで連行された彼らを見て、真田昌幸は完爾と笑ったという。
「杉原の家は、あの辺りでは名家ゆえな」
そうして縄目を解かせ、さらに彼らを臣に加えた。

その後「彼ら」がどうなったか？
寡聞ゆえ、筆者は知らない。

（後書き）

※読者諸兄へ

この物語に、歴史的矛盾があることは、筆者も充分知っている。ゆえに、寛大な読者のみなさまにおかれては、なにとぞ重箱の角をつつかないようにお願いしたい。

1．神川合戦のおよそ二ヶ月前に、真田幸村は上杉家の証人となっており、上田にはいない筈。
（ただし、資料によっては「参戦した」となっている物もある）

2．「鬨の声を上げ、鉄砲を撃ち、轟音で脅す」作戦の立案者は信幸ではなく、家臣の水出大蔵。

3．杉原四郎兵衛は地侍ではなく、室賀信俊の残党。同調したのは塩田衆（村上義清の残党など）の武士。

4．杉原たちが立てこもった城は「鳥屋城」（鳥帽子城、依田城、首切城、大年寺城、等の呼び名もあり）であるという説もある。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4068u/

子壇嶺城戦記

2011年6月27日15時26分発行